

奥州地区交流会報告

日時：２０２６年８月１９日（水）１０：００～１２：００

場所：奥州市水沢地区センター

参加：端坂支部長、佐藤副支部長、奥州保健所難病担当、
地域包括支援センター保健師

その他 １６名

内容：

１．挨拶

佐藤副支部長

端坂支部長

２．パーキンソン病を学ぶ（支部長）

パーキンソン病の運動症状について(資料を配布して、要点を説明)

３．自己紹介・現況・困っていること

Aさん

唾や食事が飲み込みに難しい。

端坂

誤嚥性肺炎にならないように口腔ケアをしっかりとってください。嚥下障害を改善するリハビリや誤嚥を防ぐとろみ剤の使用を検討してはどうか。

Bさん

仙台西多賀病院に転院した。武田先生が主治医である。初診時にたっぷり時間をとって頂き、症状等をしっかり聞いてもらえ、また、先生の説明もわかりやすかった。その後、約１か月の服薬調整入院をした。ありとあらゆる検査をし、薬の影響と思われる起立性低血圧を改善するため、減薬されたが動きに影響はない。

武田先生を信頼して治療が受けられている。

Cさん

医療講演を聴講して武田先生に診てもらいたいと仙台西多賀病院に転院した。主治医は武田先生ではなかった。約１か月の服薬調整入院をした。主治医が入院担当医師だったが、「ドパコールを増やしましょう」と言われたため、理由を確認すると「一般的な量だから」と納得しにくい説明だった。リハビリの重要性は理解できた。主治医に良い印象を持てなかったこと、遠距離通院を続けることが困難であること等を考えて自宅近くの県立病院の脳神

経内科に転院した。主治医は話をよく聞いてくれるので信頼して治療を受けている。リハビリは違う病院でしている。

Dさん

医療講演会を聴講して武田先生に診てもらいたいと思い、仙台西多賀病院に転院した。Cさんと同じ主治医である。朝のドパコールを50mgから75mgに増量され、これまで生活に大きな支障をきたしていた酷いオフや夜間頻尿はなくなった。入院当初は夜間のトイレは自力でいけないため、看護師に介助してもらっていたが、リハビリを続けていると自力でトイレにいくようになった。退院して1週間を経過した頃から軽いオフがでるようになった。通院時に主治医にそのことを伝えと薬をふやしましょうかと言われたが、しばらく様子をみたいと増量はしなかった。

Eさん

自宅近くの開業医で診てもらっている。幻聴、幻覚があることを主治医に伝えとパーキンソン病の治療薬が原因だから「パーキンソン病治療薬を止めるしかない」と言われた。パーキンソン病の治療を止めるということ？と納得できないため、転院したいので紹介状を書いてもらいたいとお願いしたが、「どこで診てもらっても同じ」と紹介状を書いてくれない。どうしたらよいか。

端坂

パーキンソン病の治療薬の影響で幻聴、幻覚などがでる人は多い。自分で自覚でき、家族・介護者も理解でき生活に支障がなければ、原因と思われる薬を中止することはない。自分で自覚できず、生活に大きな支障がある場合は薬を変えるなどの調整をするが、今、お話があったような内容はあり得ない。紹介状を書いてもらえないことも理解できない。紹介状がなくても理由を説明すれば転院は可能なので、転院をすべきと思う。

Fさん

ディオドーパをしてから、幻覚、幻聴が酷くなり生活に支障をきたしている。主治医にそのことを強く伝えて、流量を減らしてもらったところ、幻覚、幻聴は軽くなった。今、困っていることは、就寝前にディオドーパを外さなければならない。就寝前にLドパ製剤を服用しているが、夜間にトイレに歩いていけないため、家族が介助しなければならず、負担が大きい。

次回予定

日時：２０２６年１０月１４日（水）１０：００～１２：００

場所：奥州市水沢地区センター 第一会議室